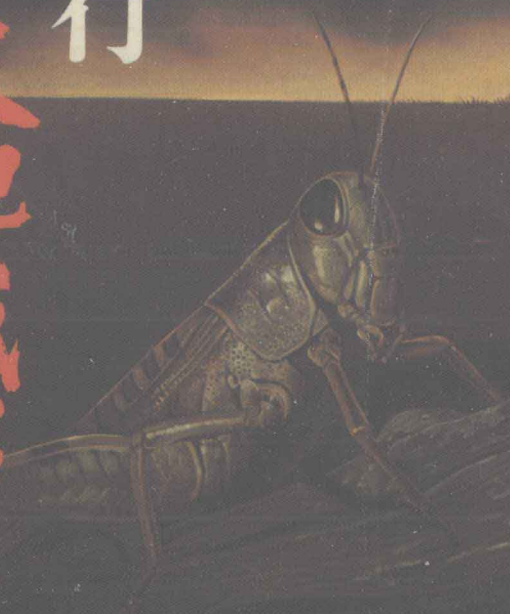


西村寿行

蒼茫の大地滅ぶ

上



蒼茫の大地滅ぶ

上
西村寿行

講談社

蒼茫の大地、滅ぶ (上)

定価 七五〇円

第1刷 昭和53年9月1日発行

著者 西村寿行 (にしむら・じゅこう)

発行者 野間省一

発行所 株式会社 講談社



〒112 東京都文京区音羽 2-12-21

電話東京(03)945-1111 (大代表)

振替東京 8-3930

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 黒柳製本株式会社

© JUKO NISHIMURA 1978 Printed in Japan

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします

目次

第1章	神の罰	5
第2章	大地の蠢動	43
第3章	潰滅	83
第4章	鬼哭	124
第5章	奥州の関	168

装
幀
野
中
昇

蒼茫の大地、滅ぶ

上

第1章 神の罰

1

カラーデータ・スクリーンがある。

スクリーンの左右には緑、青、黄色、オレンジなどに分けられたパネルがある。数字がリズミカルな金属音をたてて移り変わっている。

「解説不能です」

コンピュータの低いうなりが咆^うんだ。十万分の一秒単位で目標機の国籍、飛行予定、侵入角度などをはじき出すコンピュータが、作動を中止した。

解説不能を告げたバッジ・システム監視員の声が、かすかにふるえていた。

カラーデータ・スクリーンの傍にコンソール群がある。コンソールの一つの監視用スコープにレーダーのとらえた目標機の記号が浮かぶと、コンピュータが作動する。国籍不明機をはじきだすと、兵器割当てコンソール

が作動して、各基地にスクランブルの指令が発せられる仕組みになっている。

「三沢、千歳基地にスクランブル指令を出せ。ナイキを含む全航空隊戦闘配置」

司令官の声は重い。

バッジ・システムを統合する府中の航空総隊司令部の戦闘指揮所だ。

スクランブルを命じるコンソールが、不能になっていた。コンピュータも機能を停止している。およそ三百機くらいの敵機が日本全土に侵攻してきても瞬間に処理し、各基地に的確な迎撃指令を出せるバッジ・システムである。そのバッジ・システムが機能を失っている。

巨大なものが接近しつつあった。

巨大すぎて、バッジ・システムには捕捉しきれなかった。

航空総隊司令部戦闘指揮所から全航空部隊に戦闘配置が出されると同時に、同じ府中にある在日米第五空軍作戦司令部も戦闘配置を発令した。

航空総隊から緊急連絡を受けた陸上自衛隊方面総監部も、全師団に戦闘態勢配置を発令した。

海上自衛隊も同様であった。

千歳、三沢の両基地から全天候迎撃機F4EJファントムが金属音で大気を切り裂いて、つきつきと発進した。巨大な異常物体は日本海を、本土に接近しつつあった。

七月二十日午後一時五分。

駐倉首相は首相執務室で各大臣と対していた。

「陸海空三軍とも、戦闘態勢に突入したのか」

首相が訊いた。老齡の駐倉はしきりにハンカチで唇を拭いていた。

「たったいま」

浜村防衛庁長官が答えた。

「異常物体が何か、識別できんのか」

首相はいらだっていた。

「迎撃機がもうすぐ異常物体と接触します」

「それは、何か、レーダーの勘ちがいかなにかではないのかね。たとえば、雲を誤認するとか」

「そんなことはないと思います。各レーダー・サイトがいつせいに捕捉しているのです」

浜村長官は瘦せている。眉間に不安の皺がよつていた。

「いや、たとえばだよ、中国かソ連が核実験をやつて

だ、その放射能を含んだ雲がレーダーに映るとか」

「そんな例は、きいたことがあります」

「しかし、君」首相は空間に視線をとめた。「幅十キロ、長さ二十キロ——しかも雲のように密集した敵機など、そんなものが考えられるのかね」

「ですから、異常物体だと……」

浜村は語尾を濁した。

レーダーの誤認ではない。各レーダーがいつせいに捕捉し、米空軍までスクランブルしているのだ。しかし、浜村にも幅十キロ、長さ二十キロの物体というのは、想像に余るのだった。

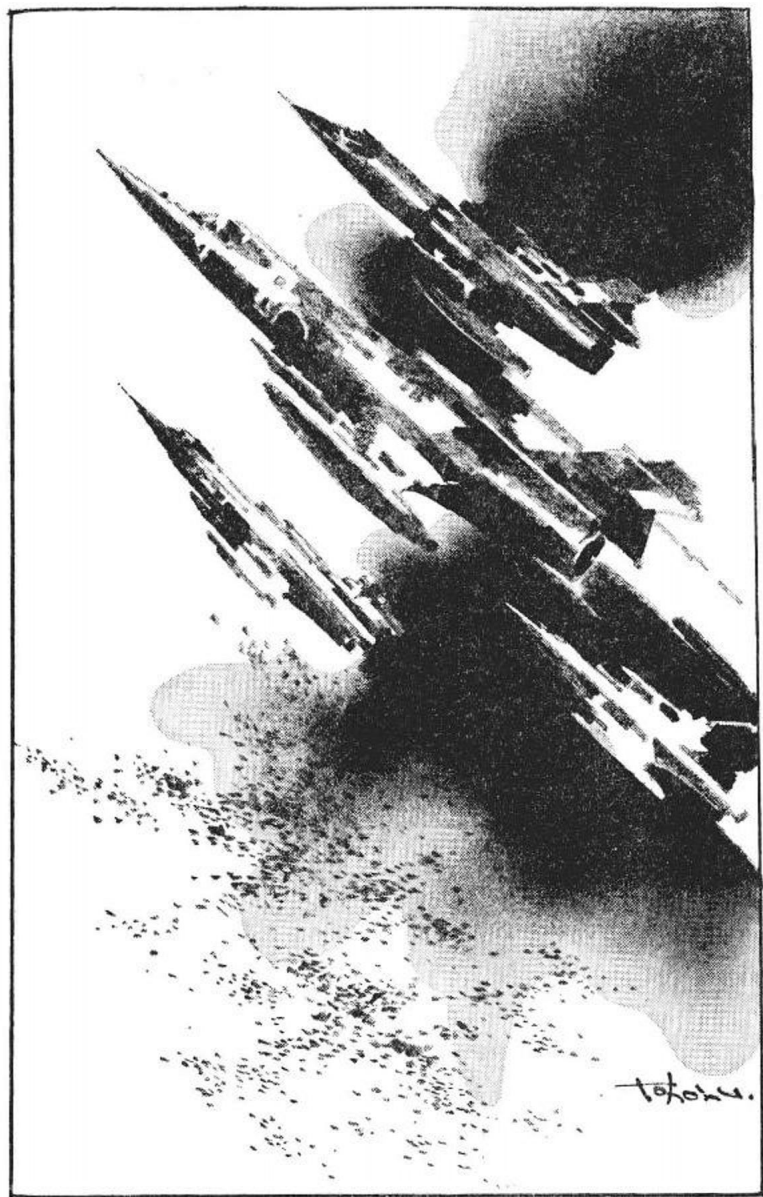
午後一時七分。

アメリカ国防省は十数枚の写真を手中にした。日本海上空を横切った軍事衛星の撮影したものであった。それには想像を絶する巨大な物体が映っていた。

午後一時三十分。

英国王室立飛蝗研究所にアメリカ・ペンタゴンより緊急連絡が入った。

午後一時四十分。



三沢基地から発進したF4EJファントムの四機編隊が異常物体に接近しつつあった。日本の領空は本土から二百キロに設定されている。その二百キロに接近する国籍不明機にはスクランブルをかけることになっていた。

異常物体は領空の外、約二百キロにあり、日本に向かっていった。

四機のF4EJファントムは領空を出て異常物体との遭遇点に向かった。

会敵点はすべて防空戦闘指揮所から指示される。コンピュータが正確な諸元をつぎつぎと算出し、誘導する。パイロットは目の前のスコープをみつめていけばよい。指示は光点となってスコープにあらわれる。その光点をスコープの中心に持ってゆくように操縦すればよいのだ。

四機ファントムは高度四千メートルで、日本海を飛びつづけた。その進路の延長線上には、ウラジオストックがある。

雲塊の上であつた。

晴れ渡った蒼穹がある。涯のない蒼穹だ。強い偏西風が吹いていた。偏西風は高度が高くなればなるほど風速が増す。一万メートルあたりになればジェット・ストリームになる。第二次大戦で発見された強い風の流れだ。

機のスクリーンの光点は中央に停止していた。別のスクリーンが前方に巨大な物体をとらえている。機のレーダーが捕捉した影像だ。

司令機の西沢機長はその影像を凝視していた。

巨大すぎてレーダーからはみ出している。通常ならレーダーの故障だと思うところだ。

西沢は緊張しきっていた。幅十キロ、長さ二十キロという異様な物体が偏西風に乗って高速で接近しているという。それが何か、見当はつかない。見当はつかないが、尻込みはできない。物体は日本を目指している。領空に入れば戦闘は避けられない。すでに全航空隊に戦闘指令が発令されている。ナイキを含む高射砲隊は異常物体に照準を定めているし、F104J百九十機、F86F百機、F86F百機、RF86F十八機、海軍攻撃機五十機、それに在日米第五空軍F4Dが百機、あわせて約五百五十機が戦闘態勢に入っている。

わずか五百五十機で幅十キロ、長さ二十キロの飛行物体に対抗できるものか、西沢にはわからない。

西沢は祈った。異常物体が他の惑星からきた軍隊でないことを。

もし、そうなら、西沢は最初に戦死することになる。F4EJファントムはバルカン砲一門、空対空ミサイ

ル・スバローおよびミサイル・ファルコンを装備している。最大速度マッハ二・四、最大上昇限度一万八千メートル。最新鋭機だが、おそらく戦闘になればそうしたものは通じまい。

「あれは！」

西沢は叫んだ。

蒼穹のかなたに黒点が浮かんできた。その黒点はみるみる拡がった。西沢は機を急上昇させた。そこからはもう地上の指揮では動けない。勘と度胸が生死を決める。

黒点ははるか下方になった。それはいまは黒点ではなかった。視界を覆うように拡がりつつある。西沢は飛翔をつづけた。異常物体が航空機でないことは肉眼でわかっていった。ただ、実体はつかめない。空全体を覆い尽くすように拡がっている。真黒い雲だ。おそろしく巨大な雲が接近しつつある。

視界が奪われた。目の下前方には、もう蒼穹はなかった。雲塊も消えていた。一面に真黒い巨大なものが拡がっている。

西沢は高度を下げた。

空を埋めた物体に接近した。

同じく、午後一時四十分。

日本政府首相を名指しで、英国王立飛蝗研究所所長、トーマス・マッキンレイ卿から電話が入った。

畦倉首相が首相執務室で電話を受けた。

電話での話を終えた首相の顔には、安堵感のようなものが浮いていた。

「何をいつてきたのです」

浜村長官が訊いた。

「異常飛行物体の正体がわかったよ」

畦倉は微笑を浮かべた。

「なんなのですか？」

「飛蝗（ひろう）というやつだ。ほら、バッタさ。日本でいうトノサマバッタだ」

「バッタですと」

浜村が大声を上げた。

「さよう。アメリカの軍事衛星が識別して、英国王立飛蝗研究所に連絡したのだそう。ローヤル・ローカスト・センターは飛蝗の研究では第一らしい。そこで、マッキンレイ卿からのわが国への警告となったわけだ。嚴重な注意、対策を要すと、な。ま、なんのことはない、大山鳴動鼠一匹というやつだ」

畦倉は声にだして笑った。皺がほころびていた。

それをみて、各閣僚が緊張を解いた。

「バッタか。ひとを驚かせやがる」

浜村は、肩を落とした。

笑わない男が一人だけいた。農林大臣の広海であった。広海はバッタの群れの巨大さを思った。飛蝗がどこに着陸するのかわからないが、農作物への被害を思うと、笑いに加わる気にはなれなかった。

2

弘前大学。

刑部保行が飛蝗のニュースをきいたのは、午後二時であった。

テレビが英国王立飛蝗研究所からの警告を伝えた。引きつづいて防衛庁からの飛蝗確認の正式発表があった。

飛蝗は午後二時現在、日本の領空約五十キロに迫っているとのことだった。強い偏西風に乗っていた。進路はそのままなら青森から函館あたりになろうとの推定だった。

刑部はそのニュースをきいて、秋野平造に電話を入れた。

電話に出た秋野は、すぐに来いと、しわがれ声をだした。

刑部は大学を出て、市外れに住む秋野を訪ねるべく車を走らせた。

刑部は弘前大学理学部生物学科に講師として席を置いていた。昆虫が専攻であった。

秋野平造は東大時代の恩師だった。出身が同じ青森とあって、東大農学部時代、刑部は秋野家によく出入りしていた。秋野が青森に帰り、刑部がまた弘前に戻って、師弟の関係はそのままつづいていた。

秋野はウイスキーの水割りを飲みながら、書齋で待っていた。

「えらいことになるな」

皺深い顔を秋野は上げた。六十七歳になる。いまはアルコール好きの、気のいい老人だった。

「わたしも、そう思います」

刑部は坐った。

「ざっと計算してみたが、幅十キロ、長さ二十キロの飛蝗集団は、およそ目方にして一億九千五百万トンになる」

秋野は刑部にも水割りをすすめた。

「そんなに……」

「どこに着陸するかが、問題だ。もし、この青森に来てみい。あつという間に一木一草残らず喰い尽くされる

ぞ」

「それほど、ひどいのですか」

刑部は昆虫が専門だが、飛蝗についてはあまりくわしくない。飛蝗は世界中で研究されているが、日本には研究機関はない。めったに発生しないからだ。

秋野は数少ない日本での研究者の一人だった。

「旧約聖書では飛蝗を三大災害の一つに位置している。

出埃及記に〈飛蝗来襲シテ埃及ノ陸地ヲ蔽イ、海岸ニ溢レ、相重^{ツミツミ}シ地面ヲ被ウ。飛蝗ハ地上ニテアリトアラユル草木ヲ食シ果物ヲ尽クシ全埃及全ク木ニハ葉ナク地ニハ生草ナキニ至レリ云々〉とある」

秋野の枯れた双眸が炯^{キラ}々としていた。

「飛蝗を英語ではローカストと略しているが、ローカストなる語原はラテン語から来ていて〈焼け跡〉の意味だそう。飛蝗に襲われたら、もはやそこは焼け跡と化するのよ。それほどおそろしい生き物だ。古代エジプト人などは飛蝗の翅^{はね}にある奇妙な紋をヘブライ文字で〈神の罰〉と書いてあるのだといった。つまり、飛蝗を防ぐ方法はなかった。狙われたら最後になる。それは〈神の罰〉だからだ」

秋野は、グラスを舐^なめた。

「わからないことが、一つあります」

「なんだ」

「こんどの飛蝗は中国大陸から飛び立ったものと思われるが、ウラジオストックから青森までは約千キロはあるでしょう。飛蝗にそんな能力があるもののですか」

「わしにも、それはわからん。実験では飛蝗の飛行能力は約二百キロとなっている。それも、あまり高いところは飛ばんのだ。だが、こんどの飛蝗は四千メートルもの高空を飛翔してきておる。なにかの加減で、飛び立つてすぐに上昇気流に捲き込まれ、そのまま偏西風に乗ったのだろう。ニュースでは、つねに強い偏西風がその高度を流れているとのことだ。強い偏西風に乗れば、千キロは問題ではあるまい。飛翔中は風を利用して、ほとんど筋肉は使用しないといわれている」

「しかし、目的は日本遠征ですか」

飛蝗が何を目的に大集団を組んで飛び立ったのが、刑部にはわからない。

「そんなことは、だれにもわからん」

秋野は、ゆっくり首を振った。

「奇妙な習性を持つておるのだ。飛蝗が太平洋を渡るのを目撃した例がある。しかも、まる二日間ひきもきらずに天日を覆うて渡ったのを確認したという。これは飛蝗の体を調べればあるていどはうなずける。飛蝗は空気袋

のような体を持っているのだ。氣囊ばかりといってもよい。食道から胃、すべてそうだ。胃は空っぽで、空気が詰まっておる。ただ、浮かんでいるだけだ。その上、やつらは海上に休憩することもあるという」

「海上に？」

「そうだ。飛蝗は幼虫を五齡に分けている。そのつど脱皮して六回目になると成虫となるが、幼虫のときは飛べない。はねるだけだ。こいつらが、大群をなして進むとき、前方に川があつて渡る場所がないときには、泳いで渡る。巨大な丸太ん棒になつてグルグル回転しながら渡るといわれておる。窒息しそうなやつが順々に上に這い上がる。その運動が丸太ん棒を回転させるわけだ。そうやって渡つて行く。しかし、なぜ大河を渡るのか、また飛蝗になつて、なぜ、海を渡るのか、それは説明されてはおらん。一見、氣まぐれと思へん。だが、その氣まぐれに襲われた地は、悲惨なことになる」

秋野はことばを切つて、刑部をみた。

刑部に飛蝗のおそろしさを悟らせねばならなかった。幅十キロ、長さ二十キロ、総重量約二億トンの大群団がどこに降下するにせよ、それはすさまじい劫掠をはじめ。悪くすると国家の存亡にもつながりかねない。

政府にその危機意識があるかどうか、疑問であつた。

これまで日本にあつた飛蝗の害といえば明治十三年に北海道十勝ノ国で起きたくらいのものだ。それも被害額はたかが知れていた。

世界の先進国で飛蝗の研究機関がないのは日本だけだ。その怠慢がおそろしい結果を生むかもしれない。現に、政府発表では接近しつつある飛蝗への対策は述べられていない。

「君は、これから知事に会つてくれんか」

「知事に、わたしが？」

刑部は怪訝そうに秋野をみた。

「飛蝗は夕刻には日本のどこかに下りよう。このまま手をこまねいていては大惨事となるおそれが強い。知事にそのことを説いて、即刻、対策を樹てるのだ」

「対策？　しかし、どのような対策があるというのです」

「小規模な飛蝗の群れの着地しようとするのを、空砲などの音で追つ払つた例がある。知事に要請させて、航空自衛隊を出動させる。群れを太平洋に向かわせるなり、日本海から逆戻りさせるなり、ともかく、なんらかのてを打たねばなるまい。あるいは空の絨毯めがけてミサイルが高射砲を撃ち込んでみるのも、一つの方法だ」

「ミサイルを」

「できればな」

「しかし、知事には先生が……」

「いや、老人の出る幕ではない。わたしには多少の知識はあるが、体が動かん。ここは、君の出番だ。飛蝗がどこに降下するかはわからんが、現在の進路は東北に向かつているのだ。どこに降りようと、大惨事が起こる。パニックが起こるのだ。それを喰い止めるには、君の行動力が必要だ。あるいは、各県で有識者が動いているかもしれないが、もし、だれも動いていなければ、東北地方は全滅する」

強い光をたたえた目で、秋野は刑部をみつめた。刑部は三十五歳になる。性格は地味だが、芯は強い。考えにうわついたところがない。こういう男はいったん情熱に取り憑かれたら、一本道を進む。県知事を説得するには適任だと、秋野はみた。

「君の説得には東北地方の存亡がかかっておる。そう思うがよい」

異常気象が東北地方を襲っていた。このところすっかり定着してしまった感のある寒冷化であった。何年にもわたって稲が実を結ばない冷害が東北地方を痛めつけていた。北極に発生する寒気団が中緯度に向かってせり出しているせいである。

異常気象は日本だけの現象ではない。世界的な規模で起こっている。ニューヨークに大寒気団が押し寄せて凍死者や事故死者を激増させた。ヨーロッパも同様である。かと思うと、逆に異常高温のところもあった。カムチャツカ、ベーリング海、中央アジア西部、グリーンランドなどである。日本では寒気団の影響で銚子沖にオットセイが群集し、茨城ではスケソウダラやアンコウがとれ、利根川にニシンが集まり、相模湾にはサケが迷い込んだ。

日本の場合には寒冷化である。もう、何年もつづいている。地球的な寒冷化だといわれている。しかし、それが去年から東北地方が主にあるが、また異常を生みつつある。暖冬現象が突如として顔をみせはじめたのだ。例年になく暖く、そのせいで極端に降雪が少なかった。

雪だけではなく、降雨量もすくない。

寒冷化の中に突如、温暖現象が挟み込まれることがある。その逆の現象もまたあるのである。だが、ふつうはそうした現象は一年きりのものである場合が多い。しかし、どうやら今年もその気配が強い。入梅時に雨量がすくなくかった。例年の半分以下であった。空梅雨といってもよい。

去年は亜熱帯性の太平洋高気圧が太平洋に居据わって

動かなかった。小笠原高気圧といわれるものである。そのために温暖現象が起きた。今年はまた別の原因が出ている。チベット高気圧である。日本海上に繰り返し繰り返し高気圧が張り出している。その高気圧は背高ノッポである。高度一万六千メートルある。そのために根が生えたようになりかけていた。

恐怖の高気圧といえる。なぜなら、温暖旱魃化の傾向が著しいからだ。降雨量がすくなければ農作物への被害が出る。そうなれば、冷害も旱魃も同じであった。現に、昨年の雪不足が河川の水不足を生じさせている。このまま、今冬も雪がすくなければ、来年は目の当てられない惨状となる。

だが、問題はそれだけではない。

飛蝗である。飛蝗は寒冷に弱い。長雨とか大雪に遇うと全滅する。最も好条件は温暖気候である。何かに歩調を合わせたように、東北地方がちょうど、その現象にあった。

飛蝗は九月頃に卵を産む。地下七、八センチに産みつける。卵は越冬する。四月には第一齢の幼虫が地上に出てくるが、そのときに雪があれば、死ぬ。また寒冷であれば孵化しない。

秋野のおそれるのはそれであった。幅十キロ、長さ二

十キロの未曾有に近い群団がかりに東北地方のどこかに降下したとする。ただでさえ旱魃化に悩まされている農作物はあつという間に食い尽くされる。だが、それで終わるのではない。例年の気候とちがう東北地方である。産みつけられた卵は温暖気候にたすけられて、来年の四月に巨大な群れがいつせいに孵化する。秋の収穫期にやられ、春の植えつけ期に全滅させられることになる。

旱魃と飛蝗で東北地方は潰滅に近い打撃をこうむることになる。

秋野のおそれるのは、それであった。

「何万年に一度の、禍事もしれん。わたしには、その聲音が聴こえる気がする」

秋野は遠い目に飛蝗の空を覆った光景を思い描いた。

3

弘前から青森にへりで飛んだ刑部保行が県庁舎に入つたのは、午後三時三十分であった。

県知事は野上高明であった。

野上は刑部を知事執務室で待っていた。

野上は五十九歳になる。東北六県の知事会会長をかねていた。東北地方きつての実力者であった。長い間、政